

# 英語学習動機と自己評価の関係

—日本の高校生の場合—

奥川 育子

キーワード：統合的動機、道具的動機、誘発的動機、因子分析、重回帰分析

## 1. はじめに

本稿は、日本の高校生の英語学習動機と英語能力自己評価との関連について調査したものである。

第二言語習得研究の分野における動機付けの研究は、1960年代頃から主に北米で盛んに行われており、日本では特に1990年代から英語学習動機に関する研究が盛んに行われている。松浦他(1997)は、10年ごと(1966, 1976, 1988, 1996年)に日本人高校生の英語学習意識について調査を行っており、「30年間を通した傾向として、全体的な好意群(英語学習に対して好意的な回答をしたもの)の減少がみられる。・・・高校生の英語学習に対する意識が徐々に下がり、消極化してきていることを表しているのではないだろうか。」と述べている。英語学習に対して興味と関心がない学生が増えてきているという現状からも、日本の高校における英語学習者の学習動機の実態を調査することは急務と言ってよいだろう。

そこで、本稿では、英語を外国語として学んでいる日本の高校生を対象に、彼らの英語学習動機がどのようなものか、また英語学習動機が自己評価にどのように影響を及ぼしているのか調査した。その結果、「言語・文化的興味志向」、「仕事・将来のため志向」、「自己満足志向」の三つの因子が抽出され、「自己満足志向」の強い学生の自己評価が高く、「言語・文化的興味志向」の強い学生の自己評価が低い傾向にあることが判明した。

## 2. 研究の理論的背景と研究課題

外国語学習に対する学習者の動機づけが学習の成否に関係があることは、これまで多くの研究で示唆されている。動機づけとは「人間や動物の行動を始動させ、方向づけ、持続させ、強化する過程を指す(東 1979)」や、「生活体の行動を生起させ、持続し、方向づける過程(青柳 1992)」と定義され、習得に長い年月をかける外国語学習には重要な要因であるといえる。また、Jakobovits and Nelson(1970)によると、外国語学習に影響を与えるものには、適正、知能、忍耐力、動機などがあり、その中で忍耐力、動機は学習成果の33%に関わっていると指摘している。

これまで多くの研究者により動機づけと外国語学習の成果との関連を調査した研究が行われているが、一貫した見解はみられていない。その理由として、言語の学習環境が、第

二言語学習(JSL, ESL)の環境か、外国語学習(JFL, EFL)の環境かによって動機づけが異なっており(Ellis1985)、また動機づけの区分がしっかり決まっておらず、研究者によってありまいであるからである。1960年代のGardnerやLambertによる一連の研究以来、第二言語学習動機に関する研究は特に北米で精力的に進められてきており、理論的にもかなり体系化されてきている。しかし、第二言語学習動機は本質的に学習者の社会的環境に依存しており、動機づけをいっそう理解していくためには様々な地域での調査が必要といえる。

動機づけが学習環境によって異なることを表す例としてGardner(1985)は、モントリオールのフランス語学習者は学習言語文化に興味があるからなどの「統合的動機」からフランス語を学習することが多いが、フィリピンの英語学習者は就職や仕事のためなど「道具的動機」から英語を学習していることが多いと指摘している。また、縫部他(1995)は、ニュージーランドの大学生を対象とした日本語学習動機を調べ「統合的動機」は来日経験があるほうが高く、また学習期間が長い方が高い。「道具的動機」は、学習期間が長い方が高い」と述べており、来日経験や学習期間によって外国語学習動機が異なり、経験が動機に大きな影響を与えているということを示唆している。

以上、外国語学習動機は学習者の学習環境に依存しており、北米で適合すると考えられる動機が日本でも適合するとは言い切れず、それぞれの環境において学習者の外国語学習動機がどのようなものであるか調査する必要がある。

よって、本研究では日本の高校生を対象に英語学習動機に関する研究課題を以下のように設け、分析・考察を行っていく。

#### <研究課題>

- (1) 日本の高校生の英語学習動機はどのような要素から構成されているのか。
- (2) 男女で英語学習動機の違いは見られるのか。
- (3) どのような動機を強くもっている学生が英語能力に対する自己評価が高いのか。

### 3. 調査の概要

・実施年月—2008年7月

・調査協力者—日本の高校で英語を学習している高校生(2、3年生)のうち、記入が不完全だった1名を除く30名(男性14名、女性16名)<sup>1</sup>。平均年齢は16.7歳(*SD*.60)である。本調査は、米国高校生交流プログラム(日本国内の高等学校に在学する高校生を対象に、米国の高校生との10日間の共同生活を通じて、相互の理解と親善を深めるという目的のもとに設立されたプログラム)において行われた。参加高校生は日本全国(17都道府県、東京、大阪からは複数の高校生が参加)から集まっている。また、このプログラムに参加す

<sup>1</sup>今回プログラム参加の日本の高校生は26名であったが、本調査には筆者が個人的にアンケート調査をお願いした高校生(プログラム参加者の友人)も数名含まれている。なお、文科系・理科系の区別は行わなかった。

るためには英語の試験や面接があり、プログラム中は積極的に米国から来た高校生とコミュニケーションをとることを求められていることから、このプログラムで選抜された高校生は日本の平均的な高校生より英語ができると考えられる(ただし、英語力がさほど高くなくても自己PR力、パーソナリティ、意欲、特技などの言葉の違いを超えるコミュニケーション力があると認められれば、プログラムに参加することができるものもいる)。よって、このプログラムの参加者を調査することにより英語に興味のある高校生はどのような動機を持ち、それらの動機が自己評価とどのような関係にあるのか調べることができると考えられる。

- ・ **アンケート**—動機づけに関するアンケートは Gardner and Lambert(1959, 1972)、郭・大北(2001)、成田(1998)を参考に、アンケートの質問を日本の状況に合わせ 30 項目作成した(Appendix を参照)。

アンケート項目は、何らかの手段として英語を学ぼうとする「道具的動機」(Gardner and Lambert1959)、英語母語話者の友達を作りたいためや自分の興味で英語を学ぼうとする「統一的動機」(Gardner and Lambert1959)、周囲の人に言われて英語を勉強するなど英語学習自体が目的となっていない「誘発的動機」(縫部他 1995)の 3 種類を中心に選んだ。

縫部他(1995)は、「道具的動機」、「統一的動機」、「誘発的動機」の 3 動機を日本語学習を目的視しないで手段視していることから「外発的動機」と総称している。その他、日本語や日本文化そのものに興味があり、日本人をもっと知りたいといった動機を「好奇心や関心」、また、きれいな日本語を話す先生にあこがれて、その先生のように日本語が話せるようになりたいというような動機を「モデルとの同一視」、さらに日本語を使って日本人とコミュニケーションをとりたいという動機を「仲間との相互作用」と命名し、これら 3 つの動機を「内発的動機」と総称している。このように縫部他(1995)では「外発的動機」と「内発的動機」を分けて考えているが、「外発的動機」と「内発的動機」は、どちらに属するのか厳密に分けることが難しいこともある。例えば「外国(英語話者)の友達と話がしたい」という質問項目は英語話者の友達を作りたいと考えれば「統一的動機」、すなわち「外発的動機」に分類されるが、英語話者とコミュニケーションをとりたいと考えれば「内発的動機」に分類される。これらの理由から、本稿の調査項目選定の際は「外発的動機」と「内発的動機」を分けず、「統一的動機」、「道具的動機」、「誘発的動機」の 3 種類の動機を中心に選ぶことにした。

以上の論を踏まえ、アンケート調査に選んだ項目を学習動機別に分類すると以下になる。

**Table1 英語学習動機の分類**

- ・ 統合的動機 (1, 2, 3, 4, 10, 13, 14, 15, 16, 17, 25, 26, 27, 28)
- ・ 道具的動機 (5, 7, 8, 11, 12, 18, 19, 20, 22)
- ・ 誘発的動機 (6, 9, 21, 23, 24, 29, 30)

なお、Table1 で用いた数字は、この分類に基づいて作成した英語学習動機アンケート (Appendix) の番号に対応している。

・ **方法**—フェイスシート (性別、英語学習期間、海外滞在経験等を記入) と質問紙に記入してもらい、その後各質問に対して、5 段階の尺度法 (1=全くそう思わない、2=そう思わない、3=どちらでもない、4=そう思う、5=非常にそう思う) で答えてもらった。

・ **変数としての英語能力自己評価**—英語学習動機に関する 30 の項目に答えた後、自己の英語能力に対する評価「私は、他の人より英語を流暢に話せると思う」 (Appendix を参照) を英語動機調査のアンケートと同様 5 段階 (1=全くそう思わない～5=非常にそう思う) で評価してもらい、その評価結果を変数として用いた。自己評価項目と因子分析により抽出された英語学習動機の下位尺度との関係は、4.4 で分析・考察する。

調査方法として、まず英語学習動機に関する項目に対して因子分析を行い、3 因子を抽出した後、*t* 検定および相関分析を行い、最後に因子と自己評価の関係を調査するため重回帰分析による統計処理を行う。

## 4. 分析と考察

### 4.1 英語学習動機尺度の分析

この節では因子分析を行い、項目間に潜在している因子の構造を探ることとする。まず、英語学習動機尺度 30 項目の平均値、標準偏差を算出し、回答に極端な偏りを示し、天井効果およびフロア効果の見られた 6 項目 (2, 19, 24, 26, 27, 28) を分析から除外した。因子分析は変数間の相関関係を基本とした分析であるため、回答に極端な偏りを示す変数を用いた場合には結果が不適切で不安定になることから、これらの項目を前もって除外することにした。各項目は 1 点から 5 点の得点範囲であることから天井効果は  $\text{平均値} + 1SD > 5$  が目安として考えられる。しかし、今回は 5 以上の項目が多数見られ、5.3 が良い切れ目で幅が広いことから 5.3 以上の項目 (項目 2, 19, 26, 27, 28) を削除することにした。フロア効果の目安は  $\text{平均値} - 1SD < 1$  とし、項目 24 を削除した。

よって、以下の項目は今後の分析では取り扱わない。

- (2) 外国(英語話者)の人と親しくなりたいから
- (19) 将来、海外(英語圏)で仕事がしたいから
- (24) 友達が英語を勉強するようにすすめるから
- (26) 海外(英語の通用する国)に旅行したいから

(27) 海外(英語話者)の友達に手紙、e-mail を書きたいから

(28) 英語が好きだから

次に、残った 24 項目の動機に対して因子分析を行った。固有値は大きいものから 6.41, 3.50, 2.79, 2.26, 1.85, 1.62・・・と変化していることから、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 3 因子を仮定し主因子法・バリマックス回転による因子分析<sup>2</sup>を行った。

その結果、十分な因子負荷量を示さなかった<sup>3</sup>5 項目(5, 8, 17, 25, 29)を分析から除外し、3 度目の主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。バリマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table2 に示す。Table2 の質問項目内容はすべて「私が英語を勉強しているのは・・・」に続く文章からなっている。なお、回転前の 3 因子で 20 項目の全分散を説明する割合は 54.44%であった。

Table 2 英語学習動機尺度の因子分析結果 (バリマックス回転後の因子パターン)

項目内容	因子I	因子II	因子III	共通性
04. 英語の映画、テレビ、ビデオを見たいから	.89	-.07	-.04	.80
14. 日本と英語圏の国の文化の違いに興味があるから	.79	.20	.01	.66
03. 英語の歌の歌詞がわかりたいから	.75	.07	-.07	.57
16. 英語を勉強することで母語をさらに理解したいから	.72	-.12	.16	.56
15. 日本語と英語の言語的な違いに興味があるから	.69	.29	-.04	.56
01. 外国(英語話者)の友達と会話したいから	.65	-.29	.11	.51
10. 英語の雑誌、漫画を読みたいから	.63	.36	.05	.53
22. 英語は国際的に通用する言語だから	.49	-.31	.34	.45
20. 将来、外資系企業で働きたいから	.38	.16	.19	.21
12. 将来仕事で、英字新聞が読めるようになりたいから	.04	.73	-.05	.54
13. 英文学に興味があるから	.09	.63	-.24	.46
18. 将来、海外(英語圏)で勉強したいから	.06	.63	.34	.51
11. 将来仕事で、英文が書けるようになりたいから	.05	.58	-.20	.38
23. 両親が英語を勉強するように勧めるから	.07	-.14	.62	.41
07. 試験(TOEIC, TOEFL, 英検)でいい点を取りたいから	.44	-.08	.52	.47
06. 外国語として学ぶのに楽な言語だから	.14	-.10	.50	.28
21. 単純に、母語以外の言語を勉強したいから	.26	-.06	.49	.31
09. 中学から勉強しているから	-.25	.28	.47	.37
30. 英語を話せるとかっこいいから	-.14	-.02	.42	.19
因子寄与	4.70	2.44	1.63	8.77
寄与率	23.94	11.95	10.27	46.16

<sup>2</sup> 因子分析とは、多数の項目間の相関行列に基づいて項目間に潜在している因子の構造を見つけ出そうとする統計手法であり、因子の抽出法の一つとして主因子解がある。また、抽出された因子が各変数に対してもつ重みのことを因子負荷量と呼ぶ。因子の解釈を容易にするために、因子軸を回転させて解釈しやすい値を求めることが多く、もっとも一般的な回転方法の一つがバリマックス回転である。

<sup>3</sup> 因子負荷量が.40であることを基準に項目を取捨した。また複数の因子にわたって因子負荷量が.40を上回るものも分析から除外した。

Table2 に示された結果をもとに、一つの因子を構成する各項目同士の類似点を分析し、それぞれの命名を行った。

因子1は、因子負荷量(-1から+1の間の値をとり、その絶対値が大きいほど因子と変数の関連の度合いが大きい)の値が高いもの(項目4「英語の映画、テレビ、ビデオを見たいから」、.89)から低いもの(項目20「将来外資系企業で働きたいから」、.38)の順に整理されており(4→14→3→16→15→1→10→22→20<sup>4</sup>)、9項目からなっている。項目4「英語の映画、テレビ、ビデオを見たいから」、14「日本と英語圏の国の文化の違いに興味があるから」、3「英語の歌の歌詞がわかりたいから」、16「英語を勉強することで母語をさらに理解したいから」、15「日本語と英語の言語的な違いに興味があるから」、1「外国(英語話者)の友達と会話したいから」、10「英語の雑誌、漫画を読みたいから」、22「英語は国際的に通用する言語だから」など日本の映画、テレビ、文化、歌、言語、漫画に対して興味を表していることから統合的動機に分類されるものとみなす。またその中でも特に言語・文化に興味を示しているので「言語的・文化的興味性志向」と名付ける。

因子2は、項目12, 13, 18, 11の4項目からなる。項目12「将来仕事で英字新聞が読めるようになりたいから」、13「英文学に興味があるから<sup>5</sup>」、18「将来、海外(英語圏)で勉強したいから」、11「将来仕事で、英文が書けるようになりたいから」等の仕事や将来に関わる項目からなり、英語学習を仕事や将来のための手段としてとらえていることから「仕事、将来のため志向」(道具的動機に分類される)と命名する。

因子3は、項目23, 7, 6, 21, 9, 30の6項目からなる。項目23「両親が英語を勉強するようにすすめるから」のように他人から誘発されて英語学習をするという項目も入っているが、7「試験(TOEIC, TOEFL, 英検など)でいい点を取りたいから」、6「外国語として学ぶのに楽な言語だから」、21「単純に、母語以外の言語を勉強したいから」、9「中学から勉強しているから」、30「英語を話せるとかっこいいから」など自己満足のために英語を勉強していると考えられる項目が多いので「自己満足志向」(誘発的動機に分類される)と名付ける。以上、本節では高校生の英語学習動機尺度の分析を行い、抽出された因子に命名を施した。

次節では日本の高校生の英語能力に対する自己評価と英語学習動機尺度の下位尺度(因子分析によって抽出された3因子)間の関連について考察する。

## 4.2 下位尺度間の関連

4.2節では、日本の高校生の英語学習動機尺度の3つの下位尺度に相当する項目に関連があるかどうか調べる。そのために、まず平均値を算出し、言語・文化的興味性志向下位尺度得点(平均3.96、*SD*0.81)、仕事・将来のため志向下位尺度得点(平均4.01、*SD*0.71)、自

<sup>4</sup> 項目20の因子負荷量は.38であり基準の.40を下回っていることから、ここでの因子解釈の参考にはしないことにする。この項目を削除するかどうかは、以後の下位尺度の内的整合性の分析で判断する。

<sup>5</sup> 因子2の中でこの項目のみ興味性動機とも考えられるが、本稿では文学は英語文化や言語を理解するための道具としての興味としてとらえる。因子2は明らかに道具的動機として分類されるべき項目がほとんどである上に、項目13の因子負荷量が.63と高いことからここではこの項目を除外せず、道具的道具として扱うべきと判断した。

己満足志向下位尺度得点(平均 3.00、*SD* 0.70)とした(Table 3 参照)。また、内的整合性(信頼性)を検討するために各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出したところ、「言語・文化的興味志向」で  $\alpha = .88$ 、「仕事・将来のため志向」で  $\alpha = .72$ 、「自己満足志向」で  $\alpha = .66$  と十分な値が得られた<sup>7</sup>。一方、下位尺度間にはほとんど相関関係はみられず<sup>8</sup>、各下位尺度間の相関が重回帰分析を行うのに十分低いことがわかる。よって、4.4 では重回帰分析により因子(下位尺度)と自己評価の関係を調べることにする。

Table 3. 英語学習動機の平均、*SD*、 $\alpha$  係数

	平均	<i>SD</i>	$\alpha$
言語・文化的興味	3.96	0.81	.88
仕事・将来のため	4.01	0.71	.72
自己満足	3.00	0.70	.66

Table 4 英語学習動機の下位尺度間相関

	言語文化的興味	仕事将来のため	自己満足
言語・文化的興味	—	.13	.22
仕事・将来のため		—	-.07
自己満足			—

次に、男女差の検討を行うために、英語学習動機の下位尺度得点について *t* 検定を行った。その結果、言語的文化的興味志向下位尺度 ( $t(28) = -1.21, n.s.$ )、仕事・将来のため志向下位尺度 ( $t(28) = -0.69, n.s.$ )、自己満足志向下位尺度のすべてにおいて男女の得点差は有意ではなかった ( $t(26) = -1.26, n.s.$ )<sup>9</sup>。また、各項目、全体でも男女差の検討を行ったが、有意差は見られなかった。

#### 4.4 英語学習動機と自己評価の関係の検討

最後に、英語学習動機の 3 つの因子のうちどの因子が自己評価への影響力が大きいかわかるため、重回帰分析を行う。各因子を独立(説明)変数、学生の自己評価結果を従属(基準)

<sup>6</sup> 項目 20 を除いたときの  $\alpha$  係数が .88、一方、全体(項目 20 含む)の  $\alpha$  係数が .86 であった。項目 20 を除いた方が内的整合性(信頼性)が上がることから、ここで項目 20 を削除することにする。

<sup>7</sup> 英語学習動機下位尺度の  $\alpha$  はすべて .60 以上であることから、下位尺度の内的整合性は示されている。

<sup>8</sup>  $r$  の絶対値が 0.0~0.2 の場合は、ほとんど相関関係がない。

	男性		女性		<i>t</i> 値
	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	
言語・文化的興味	3.77	0.95	4.13	0.66	-1.21
仕事・将来のため	3.91	0.81	4.09	0.64	-0.69
自己満足	2.83	0.53	3.15	0.81	-1.26

男女別の平均値と *SD* および *t* 検定の結果

変数として重回帰分析<sup>10</sup>で調べた結果を Figure1 に示す。英語学習自己評価は「私は他の人より英語を流暢に話せると思う」という自身のスピーキング能力に対する評価である。

「言語・文化的興味志向」から自己評価への負の標準偏回帰係数<sup>11</sup>(-.50)が、また「自己満足志向」から自己評価に対する正の標準偏回帰係数(.40)が有意であった。一方で、「仕事・将来のため志向」から自己評価に対する標準偏回帰係数(.15)は有意ではなかった。

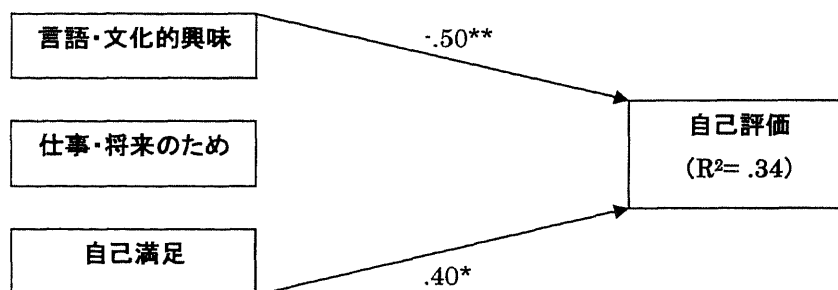
これらの結果から、今回調査に協力してくれた日本の高校生は英語学習に対して自己満足を感じるほど、また英語に対する言語文化的興味が低いほど自分自身の英語能力を高く評価する傾向にあると言える。もっとも、この結果だけでは、自己満足が高いことが自己評価を向上させたのか、あるいは逆に自己評価が高いことから自己満足も高いのかといった因果関係は不明である。一方、仕事・将来のために英語を学習するという意識は、自己評価に直接的な影響を及ぼさないことが明らかにされた。

Table 5 重回帰分析結果

自己評価	
	$\beta$
言語・文化的興味	-.50 **
仕事・将来のため	.15
自己満足	.40 *
$R^2$	.34 *

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

$\beta$ : 標準偏回帰係数



注：有意なパスのみ描いてある

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

Figure 1 パス解析結果 (誤差変数は省略してある)

<sup>10</sup> 重回帰分析とは、いくつかの独立変数で従属変数をどのように説明可能かを判断するための分析法であり、この分析の主な目的は、用いられた独立変数のうちどの独立変数が従属変数への影響力が大きいかを求めることである。

<sup>11</sup> 標準偏回帰係数は説明変数の基準変数に対する影響力の強さを表す。標準偏回帰係数の絶対値が大きい因子ほど、自己評価への影響力が強いと判断できる。



## 4.5 考察

因子分析の結果、30項目の英語学習動機から3因子(言語・文化的興味志向、仕事・将来のため志向、自己満足志向)が抽出された(研究課題(1))。Gardner and Lambert(1959, 1972)の理論によれば「言語・文化的興味志向」は英語という言語や英語圏の文化に対して興味を示す動機から構成されているので「統合的動機」であり、「仕事・将来のため志向」は仕事や将来のために英語を勉強するなど英語学習を手段としてとらえているので「道具的動機」と言える。また、「自己満足志向」はかっこよくみせたい、いい成績をとりたいなど英語学習自体が目的となっていないので、縫部他(1995)の分類の「誘発的動機」になる。

以上を踏まえ、Table1の英語学習動機の分類と今回の因子分析の結果を比べてみると、Table1の分類の「統合的動機」は「言語・文化的興味志向」に、「道具的動機」は「将来・仕事のため志向」に、「誘発的動機」は「自己満足志向」にあたり基本的に一致していることがわかる。なお、因子分析の結果に男女差があるか調べたところ、有意差はみられなかった(研究課題(2))。この理由の一つとしては、今回の調査協力者は男女共に英語に興味がある高校生で構成されていることが考えられる。

次に、動機づけと自己評価との関係を重回帰分析で分析した結果、「言語・文化的興味志向」については1%の水準で、「自己満足志向」については5%の水準で有意という結果を得た。「言語・文化的興味志向」の標準偏回帰係数は-0.50であることから、「言語・文化的興味志向」は自己評価へ負の影響を与えていることがわかる。一方、「自己満足志向」の標準偏回帰係数は0.40であるので、自己評価への正の影響をもっている。つまり、「言語・文化的興味志向」の強い学生は自己評価が低く、「自己満足志向」の強い学生は自己評価が高いという傾向があることがわかる(研究課題(3))。ただし相関関係は因果関係とは異なるので「自己満足志向の強い学生が自己評価が高い」傾向があるとはいっても、自己満足志向が強いから自己評価が高いのか、自己評価が高いから自己満足志向が強いのかということはいえない。また、「仕事・将来のため志向」については自己評価との関係が低いことがわかった。「言語・文化的興味志向」の強い学生の自己評価が低い理由として、「言語・文化的興味志向」が強い学生は目標を高く設定し、自主的に英語の音楽を聴いたり映画を見たりすることが多いが、そうすることでかえって自分の英語力不足に気づき、自己評価を低くしてしまっていることが考えられる。よって、あまりにも自分の英語能力より高すぎる(自分の英語能力では理解できない音楽を聴いたり、映画を見たりするのではなく、自分の能力と同レベルのものか少し上のもの<sup>12</sup>に触れるようにすることで自分の英語力に自信を持つことができ、その結果として自己評価を高めることができるだろう。さらに、「自己満足志向の強い学生が自己評価が高い」理由としては、「自己満足志向」の強い学生は「テストでいい点をとるため」や「単純に英語を勉強したいから」など目標が「言語・文化的興味志向」の強い学生に比べ達成しやすいものであり、自発的なものではなく状況などで設定されたものである。しかし、このような動機の強い学生は自分の目標を達成してしまえば、

<sup>12</sup> Krashen 1982 のいう  $i+1$ (学習者の理解可能なインプット)。

動機も消えてしまう可能性が高い。よって、英語に対する興味を芽生えさせ、持続させ、英語学習上達に結びつけるためには、外国の人々と交流し、海外の文化や言語との接触の機会を増やして、「言語・文化的興味志向」を強めていく必要があると思われる。

倉八(1991)、縫部他(1995)、成田(1998)などの先行研究では、一般に「統合的動機」の強い学習者の成績が高く、「誘発的動機」の強い学習者の成績が低いことを示し、倉八(1991)は、目標言語の実用価値が低く、生活の中で目標言語に接することの少ない環境では、統合的動機が高い学習者の成績が高いと述べている。それに対し、郭・大北(2001)は、シンガポールの日本語学習者の動機調査を行い、「語学学習志向因子」や「自己満足因子」などの「エリート主義」と仕事などの「道具的動機づけ」がシンガポールの大学生の日本語学習の上達に関係しており、「統合的動機づけ」は日本語学習上達の有意な予側因子ではないことを示している。

本稿では、英語学習動機と自己評価との関係を調査し、倉八(1991)、縫部他(1995)、成田(1998)、郭・大北(2001)のように学習動機と成績の関係を考察したわけではないが、「自己評価が高いものは成績も高い傾向にある<sup>13)</sup>」と仮定すると、今回の調査結果は「自己満足因子」が成績上達に関係していた郭・大北(2001)の結果を支持するものとなる。しかし、今回の調査では自己評価と成績の関係を考察することはできなかったため、この点は今後の課題としたい。

## 5. 結論

本稿では、日本で英語を学習する高校生の英語学習動機の実態を調べ、さらに動機が自己評価とどのような関係にあるか解明することを目指した。本調査で明らかになった点は以下の通りである。

- (1) 分析の結果、「言語・文化的興味志向」、「仕事・将来のため志向」、「自己満足志向」の三つの因子が抽出された。「言語・文化的興味志向」は「統合的動機」に、「仕事・将来のため志向」は「道具的動機」に、「自己満足志向」は「誘発的動機」にそれぞれ分類することができる。
- (2) 「自己満足志向」の強い学生は、自己評価が高い傾向にある(ただし、どちらが原因でどちらが結果であるかは統計的に判断することはできない)。
- (3) 「言語・文化的興味志向」の弱い学生は、自己評価が高い傾向にある(ただし、どちらが原因でどちらが結果であるかは統計的に判断することはできない)。

本調査は、日本の高校生の一部を対象にしたものである。日本の学生の英語学習動機をより一層理解するためには他の高校や中学、大学の学生、また社会人を対象にした調査を

---

<sup>13)</sup> 先行研究(藤澤・小森 2006, 松尾・小泉 1991, Nicholls 1979)では、自己評価(自己分析)と学力テストの間に明らかに対応関係があるという結果が出ている。

重ねて信頼性を向上させていく必要があるだろう。今後は学年間の差や理科系文科系の差などについての見当も行っていきたい。

#### 【参考文献】

- 青柳 肇 (1992) 「動機づけ」『発達心理学ハンドブック』福村出版
- 李 受香 (2003) 「第二言語および外国語としての日本語学習者における動機づけの比較」『世界の日本語教育』13 pp.75-92
- 小塩真司 (2005) 『研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データの解析』東京図書株式会社
- 郭 俊海・大北葉子 (2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習に動機づけについて」『日本語教育』110 pp.130-139
- 久保信子 (1999) 「大学生の英語学習における動機づけモデルの検討—学習動機、認知的評価、学習行動およびパフォーマンスの関連—」『教育心理学研究』47 pp.449-455
- 倉八順子 (1991) 「外国語学習における情意要因についての考察」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』33 pp.17-25
- 張 小杰 (2004) 「中日高校生の英語学習動機の比較研究—習得段階の視点から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部 第53号 pp.203-210
- 鶴田八郎他 (1987) 「英語学習における動機づけと学力の関係についての調査研究—中村学園大学の学生を対象に—」『中村学園研究紀要』19号 pp.21-35
- 成田高弘 (1998) 「日本語学習動機と成績の関係—タイの大学生の場合—」『世界の日本語教育』8 pp.1-11
- 縫部善憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995) 「大学生の日本語学習に関する国際調査—ニュージーランドの場合—」『日本語教育』86号 日本語教育学会 pp.162-172
- 東 洋他 (1979) 『新教育の辞典』平凡社
- 一二三朋子 (2003) 「意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討—アジア系留学生の場合—」『教育心理学研究』51 pp.175-186
- 藤沢良行・小森道彦 (2006) 「外国語学習に関する自己分析と動機の研究(2)—学力別観点からの英米文学科新入生の新たな実験—」『大阪樟蔭女子大学論集』43号 pp.23-35
- 堀野 緑・市川伸一 (1997) 「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」『教育心理学研究』45 pp.140-147
- 松浦伸和・西本まり子・池田周・兼重中・伊藤彰浩・三浦省吾 (1997) 「英語教育学モノグラフ 17 高校生の英語学習に関する意識調査」『英語教育 9 月増刊号』大修館書店 pp.44-63
- 松尾 馨・小泉令三 (1991) 「中学 1 年生の英語学習における自己の能力評定、原因、帰属、感情、学業成績の関係」『福岡大学紀要』40号 pp.269-279

- Cattell, R.B. (1966) The scree test for the number of factors. *Multivariate Behavioral Research* 1: 245-276
- Chihara, T. and Oller, L.W. (1978) Attitudes and attained proficiency in EFL: A sociolinguistic study of adult Japanese speakers. *Language Learning*. 28:55-68.
- Crookes, G. and Schmidt, R. (1991) Motivation: Reopening the research agenda. *Language Learning*. 41:469-512.
- Dornyei, Z. (1990) Conceptualizing motivation in foreign-language learning. *Language Learning*. 40:45-78.
- \_\_\_\_\_ (1994) Understanding L2 motivation: on with the challenge. *Modern language journal*, 78 (4): 515-23.
- Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_ (1997) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Gardner, R. C. (1979) Social Psychological Aspects of Second Language Acquisition. Gies H and St Clair, R. (Eds). *Language and Social Psychology*. Oxford: Basil Blackwell.
- \_\_\_\_\_ (1985) *Social Psychology and Second Language Learning*. London: Edward Arnold.
- Gardner, R.C. and Lambert, W. E.(1959) Motivation Variables in Second Language Acquisition. *Canadian Journal of Psychology*. 13: 266-272.
- \_\_\_\_\_ (1965) Language Aptitude, Intelligence, and Second Language Achievement. *Journal of Educational Psychology*, 56: 191-199.
- \_\_\_\_\_ (1972) *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Newbury House.
- Jakobovits, L.A. and R. J. Nelson (eds.) (1970) *Motivation in Foreign Language Learning*, Tursi, J. A. (ed.): 31-104
- Krashen, S. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon Press.
- Nicholls, J. G. (1979) Development of perception of own attainment and casual attribution for success and failure in reading, *Journal of Educational Psychology*, 71: 94-99.
- Oxford, R. and Shearin, J. (1994) Language Learning Motivation: Expanding the Theoretical Framework. *The Modern Language Journal*, 78 (i) 12-28.
- Scarcella, R. and Oxford, R. (1992) *The Tapestry of Language Learning: The Individual in the Communicative Classroom*. Boston: Heinle and Heinle.

## 【謝辞】

本論文作成にあたり、貴重なご助言を賜りました砂川有里子先生、宮本エジソン先生に心より御礼申し上げます。また、調査にご協力くださった方々に感謝致します。

## Appendix アンケート項目

\*名前: \_\_\_\_\_

\*性別: \_\_\_\_\_

\*年齢: \_\_\_\_\_

\*出身: \_\_\_\_\_

\*学校名: \_\_\_\_\_

\*英語を何年勉強していますか? \_\_\_\_\_年 ( \_\_\_\_\_才から)

\*英語を勉強した機関: 小学校・中学校・高校・大学・英会話学校・  
その他( \_\_\_\_\_ )

\*海外滞在経験: (例) アメリカ、旅行、2週間、 オーストラリア、交換留学、1年  
:( \_\_\_\_\_ )

● 以下の文を読み、最もあてはまる数字に○をつけて下さい。

全くそう思わない    そう思わない    どちらでもない    そう思う    非常にそう思う  
1                      2                      3                      4                      5

私が英語を勉強しているのは・・・

- |                                       |   |   |   |   |   |
|---------------------------------------|---|---|---|---|---|
| (1) 外国(英語話者)の友達と会話したいから               | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (2) 外国(英語話者)の人と親しくなりたいから              | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (3) 英語の歌の歌詞がわかりたいから                   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (4) 英語の映画、テレビ、ビデオを見たいから               | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (5) 将来、役に立つから                         | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (6) 外国語として学ぶのに楽な言語だから                 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (7) 試験(TOEIC, TOEFL, 英検など)でいい点を取りたいから | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (8) 英語の授業は卒業するのに必要だから                 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (9) 中学から勉強しているから                      | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (10) 英語の雑誌、漫画を読みたいから                  | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

(11) 将来仕事で、英文が書けるようになりたいから	1	2	3	4	5
(12) 将来仕事で、英字新聞が読めるようになりたいから	1	2	3	4	5
(13) 英文学に興味があるから	1	2	3	4	5
(14) 日本と英語圏の国の文化の違いに興味があるから	1	2	3	4	5
(15) 日本語と英語の言語的な違いに興味があるから	1	2	3	4	5
(16) 英語を勉強することで母語をさらに理解したいから	1	2	3	4	5
(17) 英語の学習が楽しいから	1	2	3	4	5
(18) 将来、海外（英語圏）で勉強したいから	1	2	3	4	5
(19) 将来、海外（英語圏）で仕事したいから	1	2	3	4	5
(20) 将来、外資系企業で働きたいから	1	2	3	4	5
(21) 単純に、母語以外の言語を勉強したいから	1	2	3	4	5
(22) 英語は国際的に通用する言語だから	1	2	3	4	5
(23) 両親が英語を勉強するようにすすめるから	1	2	3	4	5
(24) 友達が英語を勉強するようにすすめるから	1	2	3	4	5
(25) 英語の新聞、学術雑誌を読みたいから	1	2	3	4	5
(26) 海外（英語の通用する国）に旅行したいから	1	2	3	4	5
(27) 海外（英語話者）の友達に手紙,e-mailを書きたいから	1	2	3	4	5
(28) 英語が好きだから	1	2	3	4	5
(29) これからはある程度、英語ができて当たり前だから	1	2	3	4	5
(30) 英語を話せるとかっこいいから	1	2	3	4	5
<自己評価項目>					
私は、他の人より英語を流暢に話せると思う	1	2	3	4	5